

タスマニアの高校から 2

第二回 授業開始—何から何まで日本と違う

本田 貴文

日本マンガが人気

授業が始まるまでの数日の間に一回学校に行つて教科を選んだ。先生とホストマザーに言われるがままに選んだ教科は四つ。Math、ESL(第二言語としての英語)、Music(Rock)、Sportsである。ほかに必修科目があつて、選択科目を四つ選んだのかと思つたら、本当に科目が四つしかないのである。しかも気に入らなかつたら変えていいという。かなりリベラルである。ほかの日本人は先生に怒られてから嫌になり、そのクラスを変えていた。僕はそんなみつともないことはしないが、ほかにも日本にはないようなさまざまな教科がある。ビジネスや建築、フォトグラフ、ツアーリズム、料理、

ファッション、アウトドアなど。建物の行まいもそうだが、全体的に大学のような雰囲気である。

これから一〇ヶ月間通うこの学校は Don College といひデボンポートの中にある。グレード11、12のみの学校で、僕はグレード11になった。本来なら四月から高三なのでグレード12になるはずだが、早生まれで今年の三月に一七歳になったのでグレード11なのだろう。

ホストブラザーのレイス、一五歳はグレード10で違う学校 Devonport High School に行つてゐる。レイスは日本に興味があるようで、学校で日本語を勉強している。マンガが好きだ。パソコンで「ナルト」を読んでいる。こっちは日本のマンガやらアニメがすこぶ



フォース小学校を訪問、書道を教える

る人気で、マンガをきっかけに日本語を勉強し始める生徒も結構いる。Doiにも日本語のクラスがあり、校長先生が日本語の先生である。日本人の子どもの娯楽

が思わぬところで日本の国際化を後押ししていることには驚きを隠せない。

そういうえば、シドニーにいた中国人らも「ナルト」や「ワンピース」が好きだった。さらに、日本語の授業は高校だけでなく primary school（小学校）にまである。ホストシスターのゾーイ、八歳（グレード3）は家から歩いて五分の primary school に通っており、彼女もまた日本語をとっている。日本では小学生から英語を勉強する子どもは少ないが、こんな田舎でも早期からの語学教育が行われている。それも彼らからしたら言わずもがな、なのだろうが。

ある休みの日、primary school の日本語の先生から電話を受け、その primary school を訪問することになった。ゾーイと一緒にいくと、なぜか日本語を教えることになって、書道もやって見せた。その日本語の先生は Doi の校長先生の奥さんらしく、夫婦で日本語の先生という。

何言ってるかわからない

今でこそすこしは聞き取れるが、最初にタスマニアに来たときには、ホストマザーやホストブラザーの言っ

ていることが全く理解できなかった。シドニーにいたときは、相手が中国人で、どちらの英語力もたいしたことなかったので、互いにわかりやすい英語を話していた。ホストファミリーもMissy、Minnieの先生もわかりやすい英語を話してくれた。しかし、こっちに來たときたん何を言っているのか全くわからない。

オーストラリアは独特のイントネーションだから最初は苦労するとよくいうが、全く聞き取れないからなにが独特のイントネーションで、なにがそうでないのかすらわからない。そして一番つらいのは、なにかおもしろいジョークを言ってくれているのだが、全く伝わらないので「ハハハ…」と苦笑する。ジョークを聞き返すわけにもいかないので、罪悪感がつのる。聞くに、タスマニアの英語はオーストラリアの中で最もイギリス英語に近いらしい。シドニーではdinnerと言っていたのが、こっちではteaである。シドニーに住んでいるほかの日本人交換留学生にそのことを話したら「へえー、イギリスみたいだねえ」と言われた。ほかには、消しゴムはeraserではなくrubber、ガソリンスタンドはgas stationではなくpetrol station、ゴミ箱はgarbage canではなくgarbage bin。「じゃ

あピンを捨てるときは、ピンをbinに入れるの？ ああピンはbinか」とぶつぶつ言ってみる。

来る前は、オーストラリア人にまじって英語で英語の授業を受けるのは難しそうだと思っていたが、実際には、English as a Second Language (ESL) という教科があることを知った。生徒は十数人で国籍はばらばら、フィリピン、アフガニスタン、イラン、中国、フランス、ドイツ、オランダ、ノルウェーそして日本人がいる。取っている四教科の内唯一宿題がでる教科である。ここでもやはり、リスニング、英作文、英語の本を読む、スピーチ、レポートなどを扱う。ヴィクトリアの山火事についてのニュースを聞き取る課題、それに関するレポートも書いた。それぞれの国のbirth、marriage、death、つまり冠婚葬祭についてスピーチをするもの。日本の調査捕鯨の問題について書かれた本(二五〇頁程度)を読み、レポートを書く課題などをこれまでにした。ほかの生徒の中にはもうすでに何年も住んでいる人もいるので、ついていくのはたいへんだが、オーストラリア人と英語を受けるよりかは楽である。日本にけだしてJapanese as a Second Languageがある学校があるだろうか。外国人に日本人と同じ国語の授業

を受けさせて夏目漱石とか言っても、理解できるわけがないことは明白である。鎖国をしているならまだしも、マンガの足を引っぱらないでほしいところである。

クラスがない

こつちに来て最初に困ったことは、休み時間をどうやって過ごすかだ。授業は一日四コマ(午前二コマ、午後二コマ)あり、一コマは一時間四〇分、大学なみである。しかし、一日平均二〜三コマしか入っていないので、ランチタイムをばさんでフリーライン(空きコマ)が二つあるときは、休み時間が四時間あったりする。来た当初はあまりの休み時間の多さにとまどい、うろろうしたり、Yahooのニュースを見たりしていた。慣れてくると友達について行ってバスケットをしたり、話したりして過ごした。歩いて一〇分のビーチにランチを食べに行ったりもした。最近では勉強をして過ごしている。ほかの人たちはどうしているのかというところ、やはり友達と話したり、パソコンをしたりしている。ここには大きな図書館があり、蔵書の数はずいぶん多いのだが、パソコンがたくさんある。生徒はそれぞれの自分のIDを持っており、自由に使える。なので、生

徒の多くはここで勉強したり、you tubeをみたりしながら時間をつぶす。

クラスというものがないので時間になったら自分の教科の教室に行つて授業を受ける。そもそも、僕はクラスなんて要らないと思つている。クラスがあるから、いじめが発生するというのはよく言われている話である。そういうえば、最初に教科を決めたのもこの図書館だった。司書の先生と一緒に決めたのだが、彼女には困ったとき(教科を変えるとき)や、わからないことがあるときに相談できる。

タイゲンという日本人がグレード12にいる(もう一人日本人がいたが、先日帰国した)。彼は一八歳で日本では大学一年だが、早生れなのでグレード12である。なんと彼は中学二年のときからこつちにいるらしく、今年の九月に帰国して受験勉強をする(もちろん帰国生として受ける)らしいが、驚いたことに全く英文法を知らない。なんと、三単現のSも分かっていなかった。英語は問題なく話しているが、やはりレポートなどは苦労しているようだ。仕方がないので、その休み時間を使って僕が一から文法を教えている。

もともと日本の体育、柔道、ラゲビー、水泳などが盛

しすぎると感じていた僕は、「こっちのPE (Physical Education) = 体育) も厳しかつたらすぐ変えよう」と思っていたのだが、実際やってみると、ハンドボールやホッケーなどの日替わりの競技をみんな楽しんでやる時間だった。先生も「あなたが楽しむためにやっている」と言っていた。教科名も、よく見てみるとPEではなくsports recreationだった。「レクリエーション? それはいい!!」。日本の高校で真冬に死ぬほど冷たい畳の上で柔道をやったときは、「なんで、ただか高校の授業でこんなに辛い思いをしなきゃいけないんだ」と思ったものである。ある日、柔道の授業をやるうとして、その柔道場がなぜか砂だらけになっていたとき、生徒に雑巾がけをさせたあと、その教員が「まあ、あとはお前らの柔道着で雑巾がけすればいいか」と言った。こいつは「人間のクズ」だと思った。それに対して、sports recreationは一時間半ぐらい適当に汗を流すだけなので、とても楽である。

いきなり一〇〇〇人の生徒の前でギター

音楽の最初の授業に出たとき、音楽の先生にギターでどんな曲を弾くのかと聞かれ、「Tears in Heaven

(エリック・クラプトン)とか」と答え、弾いてみせたら、こんどは体育館に連れていかれて、assemblyで演奏することに。演奏すると言っても、まあ数十人ぐらいだろうと思っていたら、なんと、全校生徒がぞろぞろ集まってきて、かるく千人ぐらい集まってしまった。しかたなく、その全校生徒+先生らの前でギターを弾いて、Tears in Heavenを歌った。すると、なんだかウケたようで、すごい拍手された。後から知ったのだが、assemblyは毎月一回くらいあって、同時にバンドやら、なにか音楽の発表の場となっているらしい。つまらない集会に音楽を盛り込むところなど、粹である。僕は日本人留学生というのもあってその第一弾に選ばれたようだ。

その演奏が終わった後、歩いていたら、やたらと生徒に話しかけられた。どうやら、こっちの人は感動を直接口に出して伝えるのが普通なのである。音楽の授業は毎週月曜にセオリーをやって、あとは適当に弾いて遊んでいるだけ。たまに、作曲の課題や、Busesについて(これはオプションでBusesを選んだ)発表する課題などがあるが、基本的に自由である。音楽と言っても、RockとClassicに分かれており、Rockを選ん

だ。そして、二週間に一回ぐらい金曜に発表の場があり、それぞれの演奏を聞きあう。Hard Rockを弾るやつもいれば、Classicを弾るやつもあり、オリジナルを弾るやつもいる。僕も気が向いたら演奏するといった感じである。

誕生パーティーに二〇人

だけれが「オーストラリアは肉がおいしいらしいよ」と言っていたが、あまりそう感じたことはない。いつも、グリーンピースやニンジン、カリフラワーなどのきまりの野菜とソーセージやチキン、ラムなどの日替わりの肉料理を「me」に食べる。僕は少食なので、来る前に「あんまり食べさせられ過ぎたらいやだなあ」と危惧していたが、幸いにもそんなことはなかった。好き嫌いはないし、まずいと言うほどでもないのです。いつもちゃんと全部食べる。しかし、たまにサラダが出るときはバクバク食べる。あれはドレッシングをかけたらどれもおんなじ味だ。ちなみに、シドニーのホストマザーは運良くコックだったので毎日すごく料理がおいしかった。

学校にはランチボックスをホストマザーに作っても

らい、持っていく。ランチボックスと言ってもサンドイッチが二個入っているだけである。満ぶくになるにはほど遠いが、日本にいたときのようにばかみたいにエネルギーを使わないのでこれで十分である。Sportsの後などでお腹がへっているときは購買でなにか買って食べるが、売っているサンドイッチやジュースは高いので、めったに買わない。今は円高なのでなにを買っても比較的安いが、ジュースだけは高い。缶のコーラが二豪ドルする。ちよつと前までの一ドル一〇〇円の時だったたら二〇〇円である。高い。

タスマニアに来てから、新しい携帯を買った。たしか五九ドルだったが、こっちの携帯のシステムはプリント式で、学校のBook Store(文房具屋みたいなところ)やPetrol Stationでクレジットを二〇ドルぐらい買って使う。といっても、電話は一分一ドルぐらいで高いので、みんなメールを打つ。もちろん英語で。このメールでパーティーの招待状なんかを送る。今年の三月が僕の誕生日だったのでホームステイでパーティーを開いて、友人が二〇人ぐらい来た。こんな感じで毎週週末はどこかでパーティーがあり、たまに行く。

ナゾの科目「ホライズン」

グレード11と12は一緒に授業を受けるのだが、唯一違う点がある。それはHorizonである。Horizonだけではなんのこともわからないが、授業を受けてみても、全然なんのこともわからない。毎週水曜の朝に一時間ぐらいあるのだが、なんだかよくわからない内容なのである。しかもグレード11にはあつて12にはない。なんだか、自分の思考傾向をグラフ化する作業や酒とドラッグについて話を聞いたりしているのだが、日本の教科の道徳にあたるのか。とりあえず、Horizonを辞書で調べたら「水平線」のほかに「展望」みたいな意味もあったので、おそらく、「未来への展望」みたいな趣旨だろう。というような日本人留学生とは全く関係ない、退屈な教科である。

ところで、こっちの数学は日本に比べて遅れているので、とても簡単である。おそらく中二ぐらいの範囲をやっていると思われる。とはいってもグレード11なので進むスピードは早く、さつき因数分解を始めたばかりなのに、もうたすきがけを教えていたりする。数学は唯一教科書がある教科である。辞書よりぶ厚い、

タウンページみたいな教科書を使っている。家での勉強も必要ないし、持ち運ぶのもおつくうなので、これはいつもロッカーに入れてある。数学の教科書は学校から借りたが、音楽のセオリーを勉強するワークブックみたいなやつだけを買った。これが唯一学校関係で買ったものである。

授業は基本的にどれも楽しかったので、どれも成績がよかった。数学のテストもほぼ満点だった。四月一日から一九日までの一〇日間はイースターホリデーだったので、成績が来た。たしか、Horizon以外は全部very good(四段階で四)だった。Horizonはgood(四段階で三)だったと思う。goodの下はなんだか忘れたが、おそらくsimiとかだろう。

日本では生徒も教員も社会も厳しかった。今はずいぶん楽である。(つづく)

(ほんだ たかふみ・東京都立三鷹高校三年、
オーストラリアに交換留学中)